

2025年3月23日 第二礼拝

説教題「人にはできないが、神にはできる」マルコによる福音書10章13～27節

主任牧師 加藤 誠

「人間にはできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」(マルコ10:27)

主イエスが語られた神の国とはどのようなところなのでしょう。いわゆる天国と同じなのか、それとも違うのか。一般に語られる天国は「人が死んだ後に行くところ」です。一方、主イエスが語られた神の国の「国」は「王国／王の支配が及ぶところ」を意味します。つまり神の国は「神の愛と正しさが及ぶところ」「神の愛と正しさを真ん中にして生まれる人と人との関係」を意味します。その意味で神の国は「死んでから行くところ」と言うよりも、今を生きる「私たちの間にある」ものです。神の愛と正しさが真ん中であって人と人との関係があたたかく新しいものとされているなら、そこに「神の国はある／現存している」のです。

今朝の箇所は、主イエスの所に来た「親に連れられた子どもたち」と「金持ちの男」の姿を通して、主イエスの「神の国」を鮮やかに浮かび上がらせています。前者は一人では何もできない小さな者。後者は何でもできる金持ちで、戒めは全部守ってきたと胸を張っている者。前者は「神の国に入っている」と祝福されているのに対して、後者は「神の国」を前に悲しそうに立ち去っていきます。主イエスはその姿を見ながら「金持ちが神の国に入るのはなんと難しいことだろう…」と言われると弟子たちは驚いて「それではいったい誰が救われるのか」と顔を見合わせたのです。

主イエスの神の国を示すヒントは21節にあります。「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。『あなたに欠けているものが一つある…』」。子どもたちには備わっていて、金持ちの男に欠けていたもの一つ。主イエスの21節の言葉を表面的に読むなら「持ち物を売り払い、貧しい者に施すこと」に思えますが、この命令の実行が神の国に入る条件なら、合格できる人はいったい何人いるのでしょうか。わたしは主イエスがこの男に「欠けている」と言われたもの、それは「自分の小ささ貧しさを知ること」と受け取ります。なぜなら主イエスの神の国は、子どものように「自分だけの力では生きられない小さな者」が「よく来たね」と歓迎される場所だからです。そこに入るための条件は一つだけ。「自分の小ささ貧しさを知っていること」。そんな自分をそのまま歓迎してくださる主イエスの愛のまなざしを感謝して喜ぶことです。

一方、金持ちの男は「子供の時から戒めをすべて守っています」と胸を張りました。それゆえ主イエスは彼を慈しみながら厳しい問いをぶつけます。「君は自分の努力で神の国に入ろうとしているが、君は自分の全財産を売り払ってまで隣人を全力で愛することができるのか。君に欠けている一つのこと。それは神の愛の戒めをほんとうの

意味では生きることのできない、実に愛に貧しい小さな自分、神の前に失格者としての自分を知ることだ」と。そのことに気づかせるための厳しい問いだったのです。

主イエスは15節で「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われていますが、神の国は金持ちの男が考えていたように「自分の力、努力で入るところ」ではありません。「子供のように入るところ」です。何を受け入れるのか。自分は何もできない小さな者であり、神の真実の愛を前に薄汚れた愛しかない、失格者である自分の貧しい姿を受け入れること。同時に、その失格者を神の国に招き入れるために十字架に赴かれた主イエスの愛と赦しを感謝して受け入れること。そして、その感謝をもって一緒に招かれている隣り人を大切に覚えていくこと。そのとき私たちは主イエスの神の国の喜びを生きる者とされ、神の国は私たちの間に実現するのです。

金持ちの男は、神の愛の戒めを実行しえない自分は神の国に入る資格がないと考えて立ち去るのですが、しかし自分の貧しさと小ささに気づかされたこの時こそ、彼は主イエスのもとにとどまってよかったのです。「主よ、わたしは神の国にふさわしくない者です」と。そのとき主イエスは彼にこう語りかけたことでしょう。「人にはできないが、神にはできる。人は自分を救えないが、神の愛は罪人を救い取って下さる。愛に貧しい罪人のあなたも確かに、神の国に招かれているのだよ」と。

ある実話に基づくエピソードを聞きました。ある会社の最終面接に残った人が会社から送られたファーストクラスのチケットで面接に向かう機上、自分の隣に座ったホームレス状の女性に「どうして俺がこんな奴の隣に座らなければならないのだ」と怒りだした。すると通路を挟んだ隣の席の女性（この人も最終面接に残った人）が罵倒されている彼女に「あなたはここに座る権利のある人よ、大丈夫」と語りかけ、盾になってその男性から守った。実はホームレス状の女性は会社の面接官であり、その男性と女性がどういう反応を示すかをテストしていたという話です。男性は、自分が最終面接に残ったのは自分の実力だと誇っていたのに対して、女性の心には自分をここまで励ましてくれた人たち、特に自分一人では生きられない窮地に陥った時に支えてくれた人たちへの感謝があったのでした。

自分がここに居るのは自分の能力や努力や功績の故ではない。ただ神の深い憐れみと赦しゆえの招待であるとよく知っていて、一緒に招かれた人たちを大切に覚えあう優しさと笑顔があふれているところ。それが主イエスの神の国です。受難節を歩む私たち。つつい自分のやっていることを誇りがちな私たちに「欠けているもの」を示してください、愛に貧しい小さな者がそれでも神の愛に救い取られていることを教えてください。主イエスの神の国にふさわしい信仰を祈り求めていきましょう。